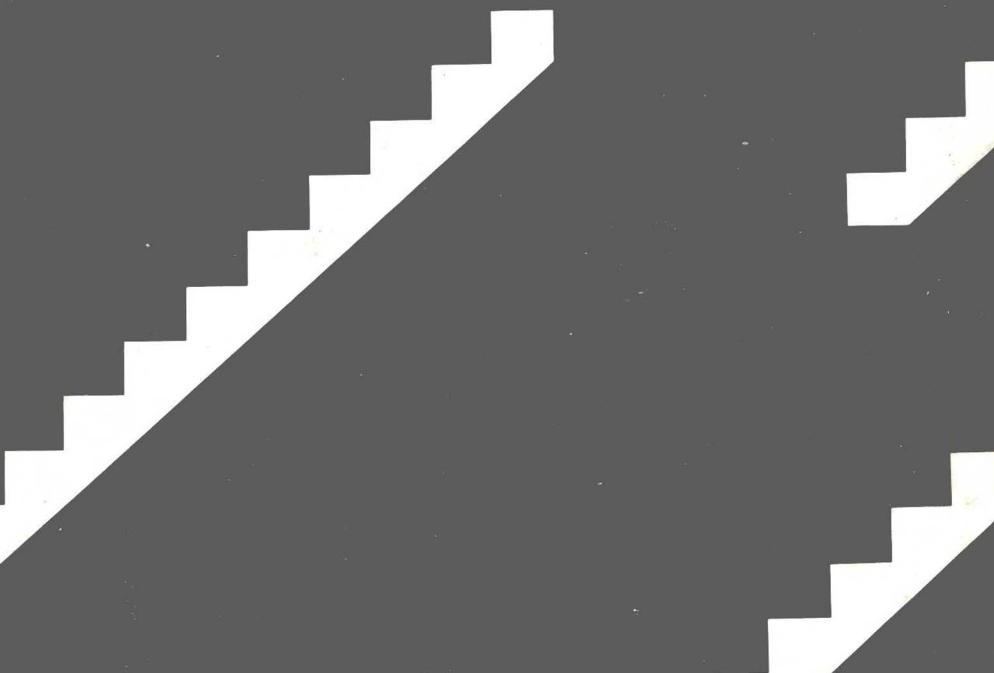




murder complex syndrome





murder complex syndrome

shin tani shiki
新谷 識

殺人願望症候群

殺人願望症候群

©一九八九 検印廃止

定価一五〇〇円

一九八九年三月一〇日初版印刷

一九八九年三月二〇日初版発行

著者 新谷 識

発行者 嶋中 鵬二

印刷所 三晃印刷

製本所 文勇堂製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八―七

振替 東京二一三四

ISBN4-12-00179-6

作品集「殺人願望症候群」目次

死は誰のもの

5

殺意の十字路

59

夜霧がいつばい

99

聖者の行進

137

天国への階段

181

最後の審判

225

あとがき

287

装幀 玉井ヒロテル

殺人願望症候群

死は誰のもの

1

電車が構内にすべり込んでくると、川口一太郎は白線の内側までさがった。ラッシュの時間帯はとくに過ぎているのに、京浜線のホームには乗客がまだかなり多い。

左手の方からよめいてきたそのレインコートの男を、一太郎は、はじめ酔っぱらいだと思った。まだ十一時を少し廻ったばかりだ。松の内も過ぎて十日もたつというのに、昼前から足もとがふらついている。それにしては、顔全体が干からびた感じでまるで生気がない。なにかからんでくるかもしれないと、一太郎は、一瞬身がまえた。

だが、肩をかすめただけで男は白線の外側へよろけてゆき、ちょっと右肩を上げたかと思うと、次の瞬間には、硬直したような身体をそのまま線路の上に倒していった。

へこれをあずかってください

すれちがいざまに男はなにかいったのだが、一太郎にはそんな風に聞こえた。だが、そのかすれたような言葉のひびきも、ギギーッという電車の急停車のブレーキ音に、すぐかき消されてしまったのである。

両手に小さい茶の風呂敷包みがあるのに気がついたのは、ホームの乗客がいつせいに騒ぎ出してからさらに何秒かあとのことである。

「バラバラだろうな」

「中年の男だってよ」

「まだ正月だっていうのにねえ、なにも死ななくてもねえ……」

野次馬に変わったホームの乗客のかたまりから離れて階段に向かった川口一太郎の耳に、そんな言葉が入ってくる。

あの負担な中年男は、かわいそうに電車に飛びこんで、いまはもう確実に死後の世界のひととなってしまった。その自殺男が残していったものを、いま、自分は持っている。包みの入っている黒い肩掛け鞆を右わきにかかえながら、一太郎は階段を降りていった。

いつもの自分だったら、あの野次馬にまじってホームに残り、最後の最後まで、事のなりゆきを見届けようとしたにちがいない。きっと、その男の遺品を持っているという意識が、自分を事故の現場から離れさせたのかもしれないと、一太郎は考えていた。その風呂敷包みは、あの男が自殺する直前に、へあずかってくれと頼んだものである。駅員や警察に渡す必要はない。頼まれたものを持っているのは正当なことで、少しもやましいところはないのだと、一太郎は自分に

いい聞かせていた。

その日、川口一太郎は弟の墓参をすませると、そのあと、久しぶりに映画を見て帰るつもりだった。もともと急ぐ用事などにひとつない身である。それに、あの事故で電車もしばらくは動かないにちがいない。一太郎は、地下鉄の乗り場の方へ歩いて行った。ただ、弟の命日の墓参りをした帰りに飛びこみ自殺にでつくわすというのもの、なにかの因縁かもしれないと思うと、いささか気持ちが悪いくらい。

「イチコロだよ、あれじゃあ。かわいそうに……」

「いいじゃないの、次の瞬間には天国だもの。病気で苦しんだあげくに死ぬのより、ずうっと幸せよ」

そこにも、事故をふり返っての会話が あった。

地下鉄のなかで、一太郎は、あの干からびたような男の顔を思い出していた。人間の生と死などというものは、本当に紙一重のことなのだ。あの男の場合は即死もいいところである。死んだあとはどうなるかわからないが、生身の苦痛はあの一瞬で終わったはずだ。

切符売場で聞いた先刻の会話が、一太郎に弟の弘二郎のことを思い出させた。

川口弘二郎は、九年前に五十三歳で死んだ。

『四十代に見られて困るんですよ。まあ、貫禄がないってことですな』

弘二郎は豪傑笑いをしながら、ひと前でよくそういつていた。実際は瘦せた兄とは似てもつかない七十五キロの堂々たる体軀で、顔つきも精悍そのものだった。それが、残暑の厳しかった九

月のある日、とつぜん血を吐いて病院へかつぎこまれた。その医者は、大した潰瘍でもないから薬で散らしましょうといった、手術もしなかった。経過がはかばかしくないので、師走に入ってから念のために病院を変えてみた。新しい医者は、いままでなにをしていたのかといって、入院させるとすぐに手術をしたが、二時間ほどでふたをしてしまった。

『胃から食道、肝臓にまで転移してしまっていて、手のほどこしようがありません。お気の毒です……』

手術が終わったあと、一太郎と弟の長男の二人だけが呼ばれて、そう宣告された。それから、弘二郎は毎日のように苦しみぬいた。

『いたいよう、いたいよう……』

午後になると、弘二郎は、子供のような言葉を連発して、すでに黄色くなっていた顔をひきつらせた。一日一日と目立って肉のおちてゆく夫に付き添う弟の妻を、一太郎夫婦は気の毒で見えられなかった。七十五キロもあった自慢の体重も、二ヵ月半で四十キロ台に減ってしまった。意識だけはしっかりしていたが、それも、死ぬ前の三日間は混沌こんとんとしてきた。それでもひどい苦痛のために、いつもどこか身体を動かしていないといられない様子で、まるで死体がかうごめいているといった感じだった。一太郎は、そばにいて正視するに忍びなかった。はじめにかかった医師を告訴してやろうとも思ったが、弟の妻の願いで、結局泣き寝入りであった。

『それでもまだ、お苦しみは軽い方だったかもしれせん。注射も少しきかせておきましたし……。肺の方へ廻ると、咳がひどくて、もっと苦しむ場合もあるんですよ』

弟が息をひきとった直後、医者はそういつて遺族たちを慰めた。

妻のツユ子の場合には弟にくらべてまったく幸わせたたと、一太郎は思う。心筋梗塞しんきんこうそくという病気はひどく苦しむと聞いていたが、ツユ子の場合には初めての発作で、しかも、ちょっとしたものがいただけで意識を失い、救急車が来たときにはもう死んでいた。死顔は安らかで、わずかの間の苦しみの様子もすっかり消え去っていた。自分も死ぬときには妻のようでありたいと、一太郎はよく思うのだ。

車掌の声が、次の駅の名をくり返し呼んでいる。その駅がデパートの地下の入口に通じていることを、一太郎は知っていた。

改札口の前で、一太郎は念のために切符を探すふりをして立ち止まってみたが、同じ電車から降りた客たちは、みんな無関心に追い越してゆく。誰もあとをつけてはいない。

デパートの地階入口から入ると、一太郎はエレベーターを探した。五階で降りたのは自分だけだということを確認すると、一太郎はやっとのことではとした気持ちになった。

さすがに有名デパートの便所は掃除がゆきとどいていると、一太郎は思う。五つ並んだ大便所の一番奥へ入ることにした。西洋式の便所だったのは予想外だったが、今日の特別な目的のためにはありがたい。

オーバーを着たまま便器に腰掛けると、一太郎は急に小便をしたくなった。十二時から午後の三時頃までしきりと尿意を覚えるのも、泌尿系統の血圧降下剤のせいである。一太郎は、鞆を戸の上の方の掛け具につるすと、オーバーをぬいでその上から掛けた。

音を気にしながら用を足していると、自然に笑いがこみあげてくる。一太郎は、思わずフンと鼻を鳴らした。

このデパートの便所へ来たのは小用のためではない。それが、入った途端に小便をしはじめている。しかし、一太郎が思わず薄笑いを浮かべたのはそのためだけではなかった。一年ほど前の同じような経験を思い出したからである。あの時も冬の最中であつた。浅草で映画を見た帰りに、すぐそばの本屋で、大判のポルノ雑誌を三冊買いこんだあとのことだ。家へ帰ってから見るのが待ちきれずに、裏通りの共同便所を探しあてると、なかに入つて、早速、写真のページをめくつてみたことがある。

身体はだんだんと衰えていつているが、好奇心だけは相変わらずだと、いまでも一太郎は思う。そのとき、ふと、右の下腹部にまた鈍痛を意識した。便器に腰掛けたまま、一太郎は、右手の中指で、右下腹のその部位を押さえてみた。たしかに、いつものところにわずかながら痛みがある。疲れのせいでもあるかと、一太郎は思った。

ズボンの前をもとに戻すと、一太郎は、立ち上がつてオーバーの下にかけた鞆をはずし、チャックを開けて、中から風呂敷包みを取り出した。鞆だけ上につると、一太郎は、また便器にまたがった。

茶の風呂敷包みは、よく見ると、かなりの使い古しである。一太郎は、上着の胸のポケットから老眼鏡を取り出してかけた。結び目をいじりながら、一太郎は、心臓の鼓動がだんだん高まつていくのを意識していた。息が少しはずんでくるのがよくわかる。一太郎は、そうした自分が急

にみじめになってきた。

やっと結び目がゆるむと、川口一太郎の指がもどかしそうに風呂敷を開け^あにかかった。なかに入っていたものが、足もとにどさりと落ちた。

おそるおそる、一太郎は、便器の左側に身を傾けて床の上に落ちたものを左手で拾いあげた。それは大型の茶色の封筒で、まんなかから二つに折ったものである。中身の中央のあたりが少しふくらんでいる。表にも裏にも、会社の名や略号のようなものはなにも書かれていないし、人の名前もない。

とつぜん、外側からノックする音がしたとき、一太郎は心臓がとまるほど驚いたが、われに返って上半身を乗り出すと、あわててノックを返した。外の靴音が移動してゆき、どうやら、一つおいた次に入っていったらしい。一太郎は、また咽喉^{のど}がつまるような感覚を覚えた。

慎重な手つきで、なるべく音を立てないように注意しながら、川口一太郎の指が封筒の口を開きにかかる。封はされていない。一太郎は、まず上の方から中身をのぞいてみた。なにか光るものが目に入ってくる。思いきってさかさにしてみると、すべり出てきたものは半透明のセロハンの包み紙で、五センチ平方ほどの大きさである。

もどかしそうにしながら臆病な一太郎の手元がそれを開くと、中にまた、同じセロハンの紙包み^みがあらわれた。その二つ目を開けると、こんどはそれまでのセロハン紙よりは少し堅そうな半透明の紙包みで、ちょうど医者が患者にくれる薬包のような感じのものが出てきた。それが最後の包みらしいとわかると、一太郎は、思いきってそれを開きにかかった。

その中身はちょうど、ざらめ、か角砂糖をつぶしたような感じの粉粒だった。紙包みの具合で少し白っぽくも見えるが、よく見るとほとんど無色で少し湿っているような気がする。分量は、普通の茶さじで一杯分もあろうか。

一太郎は、包みを少し持ち上げて鼻をよせてみた。嗅覚はいい方だが、なにも臭わない。さすがに、それをなめてみるだけの勇氣はない。一太郎は、その中身を便器のなかへ流してしまおうかと思った。実際のところ、いささか失望したような気持ちがないでもない。それに、三重の包み方は、なんとしても少し大げさすぎる。

しかし、意識のどこかでなにかひっかかるものがあるのを、一太郎は感じていた。それに、この中身では、へこれをあずかってくれといったあの死の直前の言葉の意味も不可解になつてしまふ。いったい、なんのために、こんなものを預かれといったのか、その意味がまるでわからないのである。

そのとき、ひとつおいた隣りに入っていた男の咳せきばらいがした。つづいて水を流す音が聞こえてくる。一太郎は急に疲れを覚えた。いつまでこんなところにいるても仕方がない。一太郎は紙包みをたたむと、もとの通りにして封筒の中へ戻した。

男がベルトを締めている気配が聞きとれる。間もなくボタンと戸の開く音がして、足音が遠ざかっていった。

それを待っていたかのように、川口一太郎も戸のカギに手をかけた。